

1 栄養・食生活(案)(H.23.5.26版)

〈指標の達成状況〉

改善した	目標値に達した		
	目標値に達していない		
変わらない			
悪くなっている			

※各指標の達成状況については、別添シート参照

〈総括評価〉

○栄養状態、栄養素・食物摂取については、児童・生徒及び40～60歳代女性の肥満、食塩摂取量には改善がみられたが、脂肪エネルギー比率や野菜の摂取量などについては改善がみられなかった。

○知識・態度・行動の変容については、自分の適正体重を維持することのできる食事量を理解している人の割合、メタボリックシンドロームを認知している割合など知識や態度レベルでは改善がみられたが、朝食を欠食する人の割合が悪化するなど行動レベルの変容にまで至らなかった。

○行動変容のための環境づくりについては、ヘルシーメニューの提供や学習・活動への参加について改善が見られた。

□朝食を欠食する人が増加したのは一部の年代であるのに、全体が悪くなったような表現になっていることを踏まえ男性・女性、年代などを明確にした記述のほうが良いのではないか。(違う年代のことを一文にまとめると、因果関係が不明確なのに、因果関係があるように思われる)

〈指標に関連した施策〉

- 食生活指針の作成、普及啓発
- 「食事バランスガイド」の作成、普及啓発
- 食育の推進(食育基本法施行、食育基本計画の策定)
- 特定健診・特定保健指導
- 外食栄養成分表示の推進
- 栄養成分表示の推進

健康日本21の目標値に対する直近値に係るデータ評価シート(案) (H.23.5.26版)

栄養・食生活 分野

記載留意事項・・・各項目の冒頭には、見出しとして分析結果、課題等を要約として記載してください。
詳細なデータ解析をした場合は、解析結果や二次資料を添付してください。

分野: 栄養・食生活

目標項目: 1.1 適正体重を維持している人の増加

目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
児童・生徒の肥満児の減少 (6～14歳男女: 日比式標準体重を基準として20%以上 7%以下)	10.7%	10.2%	9.2%
20歳代女性のやせの者の減少(BMI<18.5) 15%以下	23.3%	21.4%	22.3%
20～60歳代男性の肥満者(BMI≥25.0) 15%以下	24.3%	29.0%	31.7%
40～60歳代女性の肥満者(BMI≥25.0) 20%以下	25.2%	24.6%	21.8%

コメント

経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析

(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>○児童・生徒の肥満児の割合は減少</p> <p>○20歳代女性のやせの割合はほぼ横ばい</p> <p>○20～60歳代男性の肥満者の割合は増加</p> <p>○40～60歳代女性の肥満者の割合は減少 (20～60歳代の男性で平成12年以降肥満者の割合が増加しているのは、30～50歳代である。)</p>
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。	<p>□平成18年度まではほぼ右肩上がり増加した男性肥満者がその後横ばいに転じている。メタボキャンペーンの効果(日本のメタボリックシンドローム診断基準発表と特定保健指導制度の検討)が関係あるのではないかとはいえないか。40歳以上に対して特定保健指導が義務化されているので、20～39歳と40歳代以上にわけて評価できるとよいのではないかとはいえないか。</p>
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	<p>○肥満の割合は、児童・生徒並びに40～60歳代女性では目標に向けて改善。20～60歳代男性では、目標に対して悪化した。肥満者の割合の増加傾向は平成12年以降では、それ以前の5年間に比べ鈍化している。20歳代女性のやせの割合は変わらない。全体としては、4つの視点のうち、2つが改善しており、改善と評価。</p>
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	<p>□男性では目標値に達していないので、さらに対策の強化が必要。体重が増加する年代にアプローチして体重を増やさないためのキャンペーンやその世代の生活背景を考慮した環境づくりを進める必要があるのではないかとはいえないか。</p>
(5) その他コメント	<p>□各年代別の体重増加の傾向を検討する。たとえば、平成9年度20歳代世代は平成21年にはおおむね30歳代世代になっている。この10年間で肥満者が増加した世代、減少した世代などを考えてみてはどうか。</p>

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.2 脂肪エネルギー比率減少			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
20～40歳代 25%以下	27.1%/日	26.7%/日	27.1%/日
コメント			
経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○横ばいである。 (男性より女性で高く、40歳代より20歳代で高い。)		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。	□20歳代はますます増える傾向であるかなど、各年代別の傾向はどうか。		
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○変わらない。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	□全体としては変わらないが、性・年代別にみると ○○が問題、とし、対策につなげることや、特にこの10年間の食品構成の変化など、脂肪増加につながる食品群を例示できるとよいのではないか。		
(5) その他コメント	□食事の脂肪分を意識している人の増加、脂肪分の少ない食材の増加、おかず量全体の変化、間食における脂肪使用の変化等とあわせて考察可能か。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.3 食塩摂取量減少			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人 10g/日未満	13.5g/日	11.2g/日	10.7g/日
コメント			
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析		
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○減少している。 (男性より女性で低く、女性では9.9g/日まで減少。)		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。	□男女・年代別の傾向はどうか。塩、味噌、しょうゆなど、どの食材の摂取量が減少しているのか。		
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善した。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント	□うす味を意識している人の増加、うす味の食品の増加、食事量(おかず量の減少)などとあわせて考察可能か。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.4 野菜摂取量の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人 350g以上	292g/日	267g/日	295g/日
コメント			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○横ばいである。 (20～40歳代で少なく、年齢各級別で最も高いのは60歳代で340g。)		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○変わらない。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント	□野菜が増えない理由は何か。年代別の考察が必要ではないか(特に少ない性・年代や摂取が減っている年代はいつか)。一人暮らしで野菜を購入しにくい、野菜が高い、野菜の調理法を知らない、野菜を採ろうという意識はあるのか、等の調査結果は(研究レベルも含めて)あるか。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.5 カルシウムに富む食品の摂取量の増加(成人)			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
牛乳・乳製品 130g以上	107g/日	101g/日	91g/日
豆類 100g以上	76g/日	65g/日	59g/日
緑黄色野菜 120g以上	98g/日	89g/日	99g/日
コメント			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○牛乳・乳製品、豆類については減少。緑黄食野菜については横ばいである。 (豆類、緑黄食野菜については、20～40歳代で摂取量が少ない。)		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○牛乳・乳製品、豆類については、目標に向けて悪化し、緑黄食野菜については変わらない。 ○全体としては、3つの視点のうち、2つで悪化しており、悪くなっていると評価。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント	□牛乳、乳製品など国内販売量などの統計(日本酪農乳業協会等)も参考になるか。(個人レベルではないものの、どのようなものが増えているのか、減っているのか、が分かると思われる。)		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.6 自分の適正体重を認識し、体重コントロールを実践する人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H10年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
男性(15歳以上) 90%以上	62.6%	60.2%	67.7%
女性(15歳以上) 90%以上	80.1%	70.3%	76.3%
コメント			
経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○男性では増加、女性では中間評価時に減少がみられたものの、最終評価の値はほぼ横ばいまで回復している。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○男性では目標に向けて改善したが、女性は変わらない。男女とも目標値には達していない。 ○全体としては、2つの視点のうち、1つが改善しており、改善と評価。		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント	□40歳未満と以上に分けて分析をすべきではないか。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.7 朝食を欠食する人の減少			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
中学・高校生 0%	6.0%	6.2%	7.2%
男性(20歳代) 15%以下	32.9%	34.3%	33.0%
男性(30歳代) 15%以下	20.5%	25.9%	29.2%
コメント			
経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>○ 中学・高校生は増加(悪化)。</p> <p>○ 20歳代男性では横ばい、30歳代男性では増加(悪化)。</p>		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	<p>○ 20歳代男性では変わらず、中学・高校生及び30歳代男性では目標に対して悪化した。</p> <p>○ 全体として、3つの視点のうち、2つは悪化。残りは横ばいではあり、3つの視点のうち、2つが悪化しており、悪くなっていると評価。</p>		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント	<p>□ 平成9年に20歳代で欠食だった人が最終評価では30歳代になっていることも増加の要因と思われる。30歳代に入って欠食になったというよりも、20歳代の欠食習慣が30歳代になっても修正されていないのではないか。朝食を家で食べることを推進するだけでなく、会社の近くで食べる、または会社に着いてから食べるなどの選択も増やしていくことも必要ではないか。</p>		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.8 量・質ともに、きちんとした食事をする人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H8年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
20歳以上 70%以上	56.3%	61.0%	65.7%
コメント			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○増加している。		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善した。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント			

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.9 外食や食品を購入する時に栄養成分表示を参考にする人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人男性 30%以上(策定時には目標値な	20.1%	18.0%	23.9%
成人女性 55%以上(策定時には目標値な	41.0%	40.4%	50.6%
コメント			
経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○成人男性及び成人女性では増加している。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善した。		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント	□表示のある食品の種類、数などを把握することは可能か。表示の正しさを認証する仕組みはあるか。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1. 10 自分の適正体重を維持することのできる食事量を理解している人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H8年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人男性 80%以上	65.6%	69.1%	75.6%
成人女性 80%以上	73.0%	75.0%	78.7%
コメント			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析		
	○成人男性、女性とも増加している。		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善した。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント	□体重測定の習慣がある人も、大きな目で見ればこの範疇に入ると考えられるのではないか。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.11 自分の食生活に問題があると思う人のうち、食生活の改善意欲のある人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H8年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人男性 80%以上	55.6%	59.1%	58.8%
成人女性 80%以上	67.7%	67.3%	69.5%
コメント			
(1) 直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析		
	○成人男性は増加しているが、成人女性は横ばいである。		
(2) データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3) 最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○全体としては、2つの視点のうち、1つが改善しており、改善と評価。		
(4) 今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5) その他コメント	□男性が食生活改善に意欲を持つようになったのは大変意義深い。特にどの年代の関心が上がってきたのか、関心の低い世代にアプローチしていく必要があるのではないか。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.12 ヘルシーメニューの提供の増加と利用の促進			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
男性(20歳～59歳) 50%以上(策定時には目標値なし)	34.4%	28.1%	38.8%
女性(20歳～59歳) 50%以上(策定時には目標値なし)	43.0%	43.7%	61.9%
コメント			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○男性、女性共に増加している。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○男女とも策定時より数値は目標に向けて改善し、2つの視点のうち、女性では目標を達成しており、全体としては目標達成と評価。		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント	□ヘルシーメニュー提供レストランについて情報を得ることができるか。ぐるなびではヘルシーメニュー登録店が約3000軒ヒットする。(認証されていないので信頼性に欠けるが、レストランの関心度を知る目安にはなると思う。)		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.13 学習の場の増加と参加の促進			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人男性 10%以上(策定時には目標値なし)	6.1%	7.4%	8.3%
成人女性 30%以上(策定時には目標値なし)	14.7%	15.3%	16.1%
コメント			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○成人男性、女性とも増加している。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○男女とも策定時より数値は目標に向けて改善しており、改善と評価。		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント	□市町村、病院、料理教室、TVなどの通信等、具体的な学習の場の例示はできるか。健康関連番組の数や視聴率なども参考になるのではないか。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1.14 学習や活動の自主グループの増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人男性 5%以上(策定時には目標値なし)	2.4%	3.5%	3.9%
成人女性 15%以上(策定時には目標値なし)	7.8%	7.4%	8.4%
コメント			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○成人男性、女性とも改善している。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○男女とも策定時より数値は目標に向けて改善しており、改善と評価。		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント	□増えてきたといってもまだ少ない。栄養・食事だけでなく、生涯学習の一部としても取り入れるなどの工夫が必要ではないか。厚生労働省だけでなく、農水省や文科省などの事業も参照できるとよい。		

分野: 栄養・食生活			
目標項目: 1. 15 メタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)を認知している国民の割合の増加			
目標値	策定時のベースライン値	中間評価	直近の実績値 (平成22年食育の現状と意識に関する世論調査 (内閣府))
成人 80%以上(中間評価時に追加)	—	—	89.4%
コメント			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 ○データの動きはわからないが、現状の値は89.4%。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標は達成している。		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント			